

田中氏は若い頃、倫理研究所が主催する朝の会へ熱心に通っていました。ある日、尊敬するN老師より「田中君、朝の会へ通っているようだが、教材として使っている『万人幸福の栞』を、君はどのように受けとめているのかね」と質問されたのです。

田中氏は即座に、「『万人幸福の栞』は誰が読んでもわかるように、人のみちが平易に書かれてある素晴らしい本だと思います」と答えたと、「それだけかね」と素っ気なく返されたのです。

そこで田中氏は、毎朝に学んだことを重ねて申し上げたところ、老師は「フーン」と言っただけ押し黙ってしまいました。しばらくして老師は、自分と『万人幸福の栞』との出会いについて、次のようなことを淡々と語り始めたのです。

「私は小さい頃、寺にもらわれて育った、小さい頃からお釈迦様の話は嫌というほど聞かされ、お経が子守り歌だった。そんな中で激しい行をしたり、寸暇を惜しんでお経と取り組み、僧侶として修行してきた。そしていつの頃から檀家の皆様に説経するようになった。しかし心の中には、これでいいのか、お前はお釈迦様の教えがわかっているのかとの自問自答があつて、心やすらぐことがなかった。

ある日、檀家の信者さんがニコニコしながらやってきた。嫁姑の確執、息子の浪費癖で永いこと苦しみ、寺参りに来て、この世の悩みを一身に背負っているような暗い顔つきをしていたので、その日の明るい顔を見て永年の問題が解決したかと思ひ、『永い間の苦勞が報われましたか』と声をかけたところ、キョトンと

万人幸福の栞を 身読せよ！



映 栗木 へ

した顔をされたので、「問題解決したんでしょうか？」と問うたところ、この檀家さんは「問題は相変わらずです。しかし、私自身の心の持ち方を変えたんです。相手を考えるより自分が変わるうとね。住職さん、私こんな勉強しているんですよ」と言つて、一冊の『万人の幸福の栞』をプレゼントしてくれたのだ。

一六一頁の小さな本を手にとつて読み始めた瞬間、全身に鳥肌の立つたような震えがきたと老師は言います。「これは何だ、これは何だ」と唸りながら、誰にもわかるようにサラッと書かれた世の中の真理に、グイグイ引き付けられていったのです。

古来、難しいことを難しく言うのは一番簡単とされます。易しいことを難しく言うのが次に簡単ですが、一番難しいのは、難しいことを平易に表現することです。

老師はあらためて田中氏に、「田中君、この栞は読み手の力量によつてどうにも変わる本だ。人によつては『この程度だった自分でも知っている』と読み飛ばす者もいるだろうが、ある程度、道を究めたものであれば、この栞の持つ怖さがわかるだろう。一つここに書かれてあることを、一度身読してみることだ」と諭したのです。

知ったことがわかつたつもりになつていくことが、私たちには少なからずあります。「できたつもり」「やっているつもり」「わかつたつもり」などは、本当にわかつたのでしょうか、身についたのでしょうか。

一見当たり前と思える事柄を洗い直してみましよう。そして徹底的に深掘してみましよう。『万人の幸福の栞』と正対し、揺るぎない信念を築いていきましょう。